

テキスト解析の仕方と試験問題の作り方について

Comment analyser le texte et faire le sujet d'examen?

I KAWA Toru
伊川 徹

芦屋大学 Université d'Ashiya
ikawa@ashiya-u.ac.jp

回顧すれば、「講読」の授業ほど学生諸君に支持されぬ存在も珍しい。とにかく面白いのだ。学校の読物だから、まず内容が極めて無難で、学生諸君がどう間違っただけでも卑猥になつたり、誰彼を誹謗中傷したり、差別したりすることにならない作品が選定される。ドッキリ感がないばかりか、ストーリーに落ちもなければ、どんでん返しもない。若者はエロチックな場面に期待しているのに、実にさりとしていて、想像力を膨らませることもできない。全くツルツルで、のっぺらぼうみみたいな作品ばかりが選ばれ、明けても暮れても読んで訳してのみの退屈な授業が繰り返される。落ち着いて考えてみると、いや何も落ち着かなくとも、この範疇に属さぬものこそフランス文学ではなかったろうか。少々政治的内容を含んでいようが、不倫が描かれていようが、神との葛藤が主題であろうが著者と担当者に理論武装が成されていけば、教室で学生諸君に詰め寄られて立ち往生などという醜態は回避できるはずだ。ましてや文学研究を専攻した教員がこれに対応できなければ、最早お笑い種だと言わざるを得ないし、仮にそんなことを恐れて無難なテキスト選びに終始してきたとすれば、昨今の如く「講読」の授業を甚だしく減衰させたのは他ならぬ我々自身だということになってしまう。

ところで、大概のテキストの巻末には作家の略歴と作品解説、それに各ページの熟語訳などが掲載されているが、この作品の主眼はこれで、翻訳に当たっては然々の注意が必要だというような具体的指示がなく、担当教員や学生諸君の「そのときのご気分でご随意にご解釈を」とでも言いたげな編み方のものが多い。こうなると俄然教員の解析能力と感受性が試される訳で、見知らぬ作家の作品を曲解の限りを尽くして誤訳するよりも、教員自身の研究対象であるテキストを選び、学生諸君の誤訳を悠然とたしなめつつ、「あのね、モリエールはね・・・」とまるでその時代に生きていたかの如く持論を展開しながら解析を進めれば、学生諸君の眼差しにもっと輝きを取り戻せるのである。「いくら何でも最近の学生に17世紀の作品解釈は無理でしょう？」とおっしゃる向きには以下のような提案を試みたい。

*

この講読授業の配当対象は文学部フランス語フランス文学科生、優秀な他学科生および他学部生なら2年生の前期から、一般の他学部生なら2年生の後期或いは3年生以上が望ましい。或る程度のフランス事情通で、最低限度の語彙力を有していることが条件となるからである。

用意するものは作品を収録したDVD或いはVIDEOとそれらの再生機器(したがって、

対象作家の著作や劇作が映画化、TVドラマ化、VIDEO撮影されていなければ、この授業は成立しない)。VIDEOPROJECTOR と SCREEN 或いは白壁。音響設備或いはAMPLIFIER(音声増幅器)。それに毎回膨大な量の B5 サイズのコピー・プリント。DVD 或いは VIDEO を PC にダウンロードして用いる場合は教室にて DVD も VIDEO も再生機器も不要。「ウチの大学ではとてもこんな設備は・・・」とおっしゃるなら、迫力や臨場感を欠き、理想的ではないが、テレビ型再生機器のみを用いてこの授業を進めても差し支えはない。「膨大な量のプリントが・・・」とおっしゃる向きは取り敢えず、当局に切々と訴えて、気長に交渉する他あるまい。さて、準備が整えば早速授業を始めよう。ここでは17世紀の劇作家 Jean-Baptiste POQUELIN de Molière の *Le Bourgeois gentilhomme*(1670)をテキストとして採用する。

第1回目の授業では関連年表などを配布して1600年に本朝で関が原の合戦があったことや江戸に徳川幕府が設置されたこと、更にイングランドのエリザベス女王が東インド会社に特許状を与えてインド全土征服の端緒となったことを学生諸君に伝え、当時をフォーカスさせる。Molière は1622年生まれだが、当時は新宗教戦争の真只中であり、この間に誕生した Jean de LA FONTAINE と Blaise PASCAL は同期の作家であり、過去15～16年の間に誕生した René DESCARTES や Pierre CORNEILLE それに Paul SCARRON は先輩の作家であると聞き、「何と層の厚い時代だ！」と驚いてくれれば嬉しいのだが、昨今の学生諸君のことだから、恐らくキョトンとされておしまいだ。次いで1629年には我が国で女歌舞伎が上演禁止となり、女形が誕生する話や1639年の鎖国令によって西欧社会とはオランダを除いて交易が途絶したこと、1642年には浮世草子作家・俳人の井原西鶴が、次いで1653年には浄瑠璃・歌舞伎作家の近松門左衛門がそれぞれ誕生し、元禄および江戸中期文学に大いに影響を与えたことなどに触れると、多少興味を示してくれるかも知れないが、教員の精神衛生上、過剰な期待は禁物だ。ともかく、Molière がそんな時代に生きていたことさえ理解できれば、これに越したことはない。これに加えて、Louis XIV と Jean-Baptiste LULLY それに Molière の絡み合いを描いたフランス映画 *Le Roi danse* (DVD) や Prince de Conti が Louis XIV、王妃、寵姫たちを自らの城館に招き、天才的料理人 François VATEL がその接待を命じられる3日間を描いた英仏合作映画 *Vatel* (DVD) を援用すれば、当時の宮廷を彷彿する決定打となるに違いない。まさに百聞は一見に如かずの欠くべからざる教材だ。

この後、配布プリントを基に、Jean-Baptiste POQUELIN が Louis XIII の王室付き室内装飾家のタイトルを持った Paris の商家の長男に生まれながら、20歳の誕生日を目前に女優 Madeleine BÉJART と駆け落ち、Molière を名乗り、以後13年に亘る旅役者を経て Versailles に凱旋、Louis XIV の王室付き劇団長となるも、妻 Armande BÉJART に振り回され、親友の音楽家 Jean-Baptiste LULLY に裏切られ、遂に舞台の上で最期を迎える件を話すと、あまりにも数奇な人生の所為か教室は静まり返る。

次に、1668年(復刻)版のモリエール全集所収の *LE BOURGEOIS GENTIL-HOMME* の表紙(左に Monsieur JOURDAIN がトルコ人たちに取り囲まれている構図の版画、右にタイトル他)

LE BOURGEOIS GENTIL-HOMME./ COMEDIE-BALET. / Faite à Chambord pour le Diver- / tiffement du Roy, au mois / d'Octobre I670. / Par I.B.P. DE MOLIERE. / Et representée en public à Paris, pour la / premiere fois, fur le Theatre du Palais / Royal, le 23. Novembre de la mefme / année I670. / Par la Troupe du Roy.

と予め担当者が用意した現代フランス語対訳(*le texte imprimé au temps de Molière*)

LE BOURGEOIS GENTILHOMME. / COMÉDIE-BALET. / Faite à Chambord pour le
diver- / tissement du roi, au mois / d'octobre 1670. / Par J.B.P. de MOLIERE. / Et
représentée en public à Paris, pour la / première fois, sur le théâtre du Palais / Royal, le
23 novembre de la même / année 1670. / Par la troupe du roi.

を配布し、比較対照を試みると、大いなる特徴としては、gentilhomme が未だ2語或いは合成語であったこと、当時は名詞の頭文字がドイツ語同様大文字であったこと、s と f を初め i と y、I と J の混交が行なわれたことが認められる。とりわけ、f が頻繁に s の代用となることを理解させると、vfage > usage とか eftre > estre > être などの規則性を踏まえて、当時の印刷物を苦もなく現代フランス語に書き改めることができるようになる。こうして、現代仏和辞典を用いて当時の文献の翻訳が或る程度可能となり、元禄時代の日本語を古語辞典片手に現代語訳するよりも遥かに容易であるとの認識が生まれる。

*

さて、第2回目以降の授業では関連する「重要事項解説」のプリントや『町人貴族』の日本語台本を毎回配布し、DVD 或いは VIDEO (Comédie française の公演録画が一般的で、全5幕を3時間程度に圧縮演出されたもの) を上映する。この戯曲は第1幕の Maître à danser, Maître de musique の会話に始まり、Maître de philosophie, Maître d'armes, Maître tailleur, Madame JOURDAIN, その娘 Lucile, その恋人 Cléonte, 女中 Nicole, その恋人 Covielle, 邪まな貴族 Dorante, 侯爵夫人 Dorimène が華麗に登場、ミュージカル仕立ての舞台上、町人ながら貴族になろうと努力する Monsieur JOURDAIN に次々と絡むという比較的単純な筋書きとて音楽・バレエ付きドタバタ喜劇の感は否めない。しかし、その音楽とバレエに溢れた映像こそ学生諸君を引きつけて已まないのだ。まず、2~5名の学生諸君に配役し、各人が登場人物の喜怒哀楽の表情をつかむように指示して、2~3分の長さで該当する場面のフランス語版 DVD 或いは VIDEO を上映する。その後、先程の学生諸君が日本語台本を片手に教壇に並び、同じ場面を感情たっぷりに日本語でなぞる。彼らが席に戻ったところでもう一度同じ場面を映写する。限られた時間内ながら、ほぼ全員の学生諸君を登壇させることで、参加型授業であることが認識される。Le Roi danse や Vatel の上映を割り込ませようとすると、上映時間3時間の長丁場を前期或いは後期のみ12~14回で全うすることは不可能となる。そこで年間授業を想定し、前期の最終回に後期のあらすじを履修学生に伝えた上でダイジェスト版を映写し、後期の冒頭で前期のあらすじを参加学生に述べた上でダイジェスト版を上映する配慮が必要となろう。

この授業では1668年版テキストの総てを学生諸君に配布しないので、2~3回に1度は analyse の日を設け、例えば MONSIEUR JOURDAIN のセリフ (p.256) を現代フランス語に書き改める宿題をその直前の週、全員に課 (B5 版の定型用紙を配布) した上で、2名 (欠席者が発生した場合のリスク回避および長文の場合の分担のため) の解析担当者を指名する。当該日には、まず宿題を回収し、教員が正解の現代フランス語を板書し、解析担当者が教卓に就き、フランス語を音読後、翻訳を開始する。その根拠を教員が担当者に求め、うまく回答できない場合はクラス全員の中から指名して回答させる。正解者がいなければ、已む無く教員がその解説をするという授業形態だ。こうした授業を反映した定期試験問題としては、以下のような設問が考えられよう。

I) 次の文のイタリック部分について、後の設問に簡略に答えよ。猶、下線部 a) と b) については、現代フランス文に書き改めること。

MONSIEUR JOURDAIN

Paix, fongez à ce que vous dites. Sçavez-vous bien, ma Femme, que vous ne fçavez pas de
 1) 2) 3) 4)
 qui vous parlez, quand vous parlez de luy? C'est une Personne d'importance plus que vous
 5) 6) 7) 8)
 ne penfez? Un Seigneur que l'on confidere à la Cour, & qui parle au Roy tout comme je
 9) 10) 11)
 vous parle. N'est-ce pas une chofe qui m'est tout-à-fait honorable, que l'on voye venir chez
 a) 12) 13)
 moy fi fouvent une Personne de cette qualité, qui m'appelle fon cher Amy, & me traite
 14) 15)
 comme fi j'étois fon égal? Il a pour moy des bontez qu'on ne devineroit jamais ; & devant
 16) 17) 18) 19) 20)
 tout le monde, il me fait des careffes dont je fuis moy-mefme confus.
 21) b) 22) 23)

- 1)を文章に改めよ。(Fichiez- moi la paix. / Foutez-moi la paix.)
- 2)の類義語を記せ。(se rappeler ~ / se souvenir de ~)
- 3)は動詞(dire)の直説法現在形。
- 4)は動詞(savoir)の直説法現在形。
- 5)の意味を言え。(~について話す)
- 6)を指す語を文中に求めよ。(un Seigneur / une Personne d'importante / une Personne de qualité)
- 7)は動詞(être)の直説法現在形。
- 8)に関連して、VIP をフランス語で何と言うか。(une personne très importante)
- 9)のような ne を文法上何と呼ぶか。(ne explétif)
- 10)は動詞(considérer)の直説法現在形。
- 11)は具体的には当時の誰か。(Louis XIV)
- 12)の意味を言え。(全く / すっかり)
- 13)は動詞(voir)の接続法現在形。
- 14)の意味を言え。(貴族)
- 15)を指す語を文中に求めよ。(un Seigneur / une Personne d'impotence / une Personne de cette qualité)
- 16)の意味を言え。(まるで~かのように)
- 17)は動詞(être)の直説法半過去形。
- 18)の意味を言え。(好意 / 親切心)
- 19)の意味を言え。(決して~ない)
- 20)は動詞(deviner)の条件法現在形。
- 21)の意味を言え。(みんな)
- 22)は baiser や embrasser とどう違うのか。(毛のある部分への接吻を言うので、ペットの動物を愛撫するときにも用いる)
- 23)の意味を言え。(~に畏れ入る)
- a) (N'est-ce pas une chose qui m'est tout à fait honorable)
- b) (il me fait des caresses dont je suis moi-même confus)

- II) Jean-Baptiste POQUELIN de Molière の戯曲 *LE BOURGEOIS GENTILHOMME* について、いつどこで初演されたか。
1670年10月、シャンボール宮殿にて。
- III) この芝居の音楽を担当したのは誰か。
Jean-Baptiste LULLY ou LULLI
- IV) ギリシャ・ローマ演劇の基盤が一旦失われ、16世紀になってフランス演劇が再度萌芽したのは何故か。
皮肉なことに演劇を白眼視したカトリック教会の典礼に見出され、クリスマスや復活祭儀式の活人画化、つまり善男善女の教導のため考案された。
- V) ユマニスト *humanistes*・リベルタン *libertins*・モラリスト *moralistes* の三位一体について略述せよ。
16世紀の新旧教徒の衝突の後、カトリック的古典主義の17世紀にあつて、いずれも不信心・神からの自由・理性の自由を尊重する知識人である点で三位一体と言える。

前問 II)については、第1回目の授業中に配布する *LE BOURGEOIS GENTILHOMME* の表紙を解読すれば、容易に解答できるし、III)～V)に関しても配布プリント「重要事項解説」を検索すれば、これまた容易に解答できよう。レヴェルの高いクラスでは試験実施時に持ち込みを一切不可とし、一般的クラスでは自筆ノートのみ持ち込み可、或いは自筆ノートと配布プリントの両方を持ち込み可とすれば、難易度調整が3通りに可能となろう。優れた翻訳は普段の授業中に解析担当者と授業参加者それに教員の間で十分に練り上げられるので、定期試験に於いてそれを再度聞くことはしない。むしろそういう翻訳が導かれる過程、つまり不定法や熟語を知っているか、代名詞の先行詞を正確に指摘できるか、授業中に板書した解説や類義語とその用法を理解しているかなどを訊ねるべきである。例えば、前問 I)の1) Paix. (黙れ!) は *Fichez-moi la paix.* 或いは *Foutez-moi la paix.* の省略であり、類似表現に *Silence!* や *Taisez-vous!* があることを知っているべきであるし、2) *Songez à ce que vous dites.* (自分の言っていることを考えてもみろ!) を直ちに *Rappelez-vous ce que vous dites.* や *Souvenez-vous (de) ce que vous dites.* と言い換えられるかどうか、14) *une personne de qualité* (貴族) には *un homme de qualité* という表現もあり、他にも *le vin de qualité* (良質のワイン) や *l'écrivain de qualité* (優れた作家) など類似表現がある訳で、16) *comme si* を知って、*Il dort comme s'il était mort.* (彼は死んだように眠っている) 程度の作文が直ぐにできるかどうか、23) (*dont*) *je suis moi-même confus.* (私自身、これには恐れ入っておるのだ) が *Je suis confus de votre gentillesse.* (ご親切痛み入ります) という常套句に繋がるだろうか・・・などを多角的に評価したい。勿論、定期試験の得点に普段の好演技や名解析それに宿題(現代フランス語へのリライト)の好成績も加味した上で最終的評価を下すことは言うまでもない。

以上見てきたように、17世紀の作品でさえ「講読」の授業に対応させられる訳で、当然ながら、それ以降の戯曲や小説も会話体の部分を選んで解析個所に設定すれば、学生諸君を教壇や教卓に上げての同じような対応も可能である。この方法を採用すれば、ひたすら読んで訳しての息の詰まるようなつまらぬ授業も回避できるはずだ。また、担当者の中にはテキストの全訳に固執する向きもいらっしゃるが、往々にして教員の「全部終えた」という自己満足にしかなり得ない。我々はそれを出版する訳でもなく、初級フランス語文法の知識が正しく認識されているかどうか、美しい発音と抑揚でフランス文が読めるかどうかを評価すべきであるし、それこそが教育の目標でなければならない。そのためには部分訳で充分であり、残りの時間をフランス文化習得の機会に振り分けることもできよう。